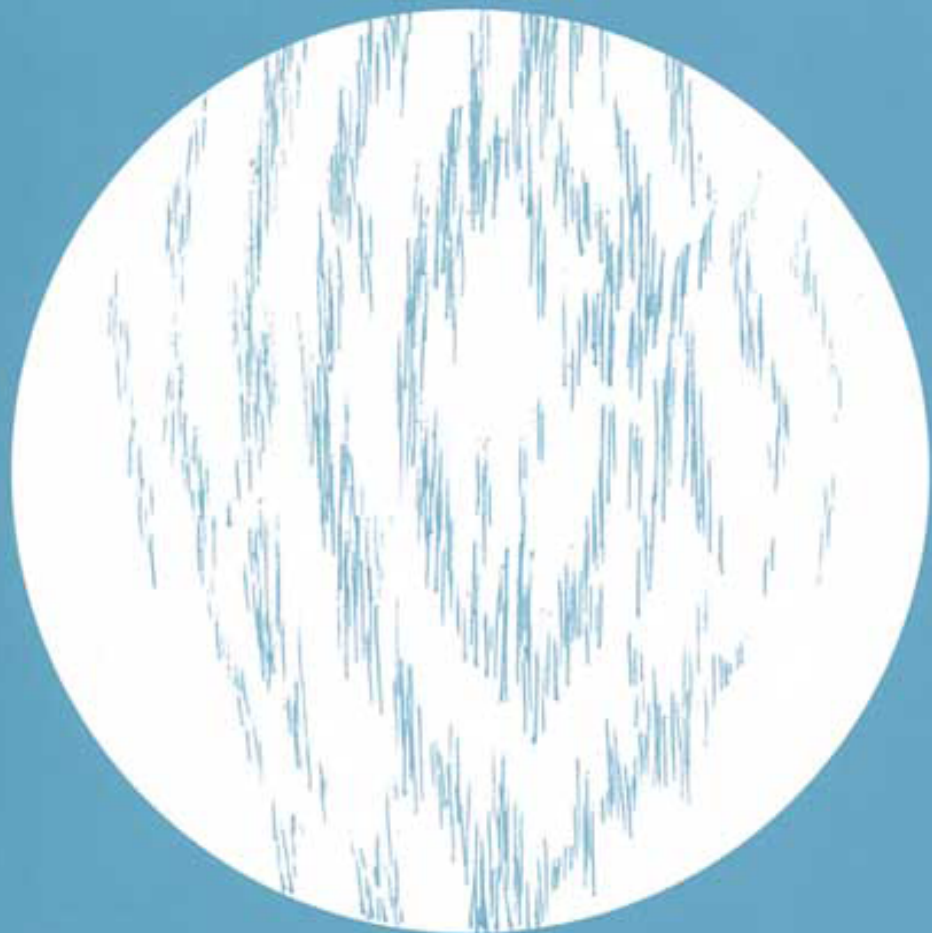


# 船団

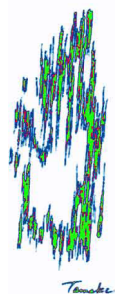
●第83号

特集「取り合わせ」の  
時代



## 鶏キムカズの登場

坪内 稔典



俳句は、たとえると小石である。小石がいつぱいあるとき、どの石も同じようだと目立たない。あるいは俳句は砂浜の貝殻である。とびきりきれいでないと無視されてしまいうだろう。

現在、多くの俳句は特徴のない小石や貝殻に似ている。だから、あまり注目されることもなく、ごく自然に忘れられてゆく。元々、大多数の俳句はそのようなものである。いわゆる月並句とか駄句であり、おびただしい駄句を残してきたのが俳句の歴史であった。個人もまたそれは例外ではなく、二万を超す俳句を作った正岡子規の句のほとんどは駄句である。高浜虚子にしても中村草田男にしても加藤楓邨にしてもそれは同様だ。

かつて子規はその評論「芭蕉雑談」（明治二十八年）において、「芭蕉の俳句は過半悪句駄句を以て埋められ上乘

と称すべき者は其何十分の一たる少数に過ぎず。否僅かに可なる者を求むるも寥寥晨星の如し」と述べたが、寥寥晨星、すなわちわずかな夜明けの星ほどにでも秀句があったとしたら、実はそれはすごいことなのだ。

哲学の音のはじまりは水鳥

星座解く音水鳥の目覚める音

これは木村和也句集『新鬼』（本阿弥書店）にある作品。というよりも、和也の句で私をはじめ感動した作品である。私は「船団」61号の会員作品欄でこの句に出会った。二〇〇四年初夏のことである。その時は「今号の15句」欄で「星座解く」を取り上げ、「上句と下句の關係がおもしろい」と述べた。どんなふうにおもしろいかの説明をしていないので、私の感想は印象批評にとどまっているが、以来、なんとなくこの二句が心のどこかにひっかかっていた。こんど、『新鬼』で再びこの二句に出会い、これが確然として秀句だと感じた。次は『新鬼』の私の跋文の一節である。

哲学の音と水鳥（季語）が「はじまり」という言葉を介して取り合わされている。その結果、水鳥は哲学の音を立てているし、哲学は（哲学の本でもよい）は水鳥の気配を

帯びている。哲学と水鳥がたわむれ、ときに一体化し時に弾き合う。ここには今までにはなかつた風景が現れている。

次の句も事情はほぼ同じだ。「星座解く」はどんな音か。「水鳥の目覚める音」だ。二つの音が響き合い、この世の始原の音とでも言うべきひそかな音が宇宙に満ちる。ここでは「星座」と「水鳥」が音を介して取り合わせになつており、その意外な取り合わせを通して、読者は不思議な始原の音を聞くだろう。

この後で私は、二句の文体上の特色に及んでいるが、そのあたりは句集を手にして読んで欲しい。

木村和也は一九四七年生まれ。今は六十代だが、中学生時代に俳句を作り始め、長い中断をはさんで二〇〇三年に船団の会に現れた。そして次のような句を発表した。

水の姿で箱にしまわれている晩夏

水の姿で人が歩いている晩夏

寝かされている白葱は裸である

どこを切つても海鼠は無神論である

梨を剥く道はずれているみたい

牡蠣酔食う天文学者になるはずが

こういう句がおもしろい。最後の句、普通は酔牡蠣と言うが、それを牡蠣酔と言つたのは、殻付きの牡蠣に酔を垂らしているのだろうか。ともあれ、酔牡蠣を食べながら、自分、あるいはその場にいる誰かが、「天文学者になるはずだった」というところがおもしろい。酔牡蠣と天文学者になることにはほとんど関係がないが、でも、このように五七五の言葉になつてしまうと、両者には濃厚な関係がある気になる。そこがおもしろいのだ。

実は、私は『新鬼』の跋を次のように書き起こしたのだつた。

木村和也。キムタクならぬキムカズだが、彼とこの句集『新鬼』の出現は、もしかしたら、俳句史の一つの事件かもしれない。

私は事件になることを期待している。俳句は昔から中高年世代を中心とした文芸であった。そのまぎれもない事実のなかで、その世代の底力を大胆に自在に、そして暴力的に發揮してほしいのだ。その時、キムカズの登場はまさに事件になる。

# 会員作品



坪内 稔典

友だちがいない晩夏のバイオリン  
城山の緑泥片岩秋の青  
和歌山の城の裏坂海光る  
紀州産青石の坂城の坂  
月の出の波うちぎわにいてはだし  
蛸干して秋の日を踏む八十歳  
青不動明王開帳片時雨

中谷 仁美

秋雨に真面目な猫と大あくび  
ちちろ鳴くがんばれちよっという女  
タンバリン叩いて喉の奥に秋  
みみず鳴く蓋開いたまま夜の鍋  
また今日も五分で許してしまう秋雨  
網膜がかなしくなるの九月尽  
へそあつて戸惑いもあり虫の闇

中原 幸子

朝おきて朝ありアメリカンチェリー  
汗涼し山の向こうの山に来て  
空にたくさん海にたくさん汗たくさん  
うっすらと汗やんわりと同舟す  
汗つちやうセイカツリコウガクブって？  
枇杷の種まただまされてあげている  
残暑様これから少し酔うところ

陽山 道子

緑蔭の吐息を溜めて銀竜草  
麦秋のすこし向こうに愛と罪  
代々の犬が寝そべる山桜桃  
ときどきはみんな集れ大西瓜  
大皿の散らばるパセリ晩夏の夜  
退屈な大人になるな花火の夜  
新涼や友へ手描きの地図送る

火箱 湖歩

十六才乳房に蛭育ており  
脳学者M氏バナナの皮をむく  
フアスナーがバカになったりして晩夏  
釉薬の瓶に晩夏の光溜め  
合歡の木の葉擦れ眠れば女の子  
かなかなや自分でつくるワンピース  
銀漢や大きな鱗落ちている

